

日本国際文化学会

<http://www.jsics.org>

ニューズレター

日本国際文化学会事務局
〒102-8160
東京都千代田区富士見2-17-1
法政大学国際文化学部
熊田泰章研究室

厳しい残暑が続いております。本年7月14（土）、15日（日）の両日、第6回大会が沖縄の名桜大学で開催されました。しかし、台風による飛行機欠航のため、参加できない方が多数ありました。会長以下理事会の判断により、臨時秋季大会を開催することに致しました。ここにそのプログラムを掲載いたします。また、名桜大学大会に参加できなかった方々のために、名桜大学で準備された共通論題2テーマ、ならびにフォーラムの概要をまとめていただきました。併せて本号に掲載いたします。

日本国際文化学会 2007年度 臨時秋季研究大会のお知らせ

- 日時／2007年9月17日（月・祝日） 午前10：00より
- 会場／早稲田大学西早稲田（メイン）キャンパス4号館・3号館
- 参加費（一律500円）、弁当代（1000円）、懇親会費（一律500円の予定）
- 申し込み郵送宛先：169-8050東京都新宿区西早稲田1-6-1
早稲田大学政治経済学部山崎眞次研究室
日本国際文化学会2007年度臨時秋季大会実行委員会
- 参加申し込み郵送期限：9月10日

プログラム

自由論題（10：00～12：00）

セッションA〔文化と思想〕

4号館201教室

- ◎司会 木下資一（神戸大学大学院国際文化学研究科教授）
- ①柴理子（東京情報大学情報文化学科講師）
「メディアの中の「東欧」：明治期の新聞報道を手がかりに」
- ②鈴木裕輔（法政大学国際日本学研究所）
「石橋湛山における経済的自由主義と国際協調」
- ③齊藤泰治（早稲田大学政治経済学術院教授）
「中国近代の自由論」

セッションB〔文化とコミュニケーション〕

4号館202教室

- ◎司会 熊田泰章（法政大学国際文化学部教授）
- ①中村優子（立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程）
「自己／他者、アクティビティ／アドベンチャー：英語と日本語の広告における、自然のイメージと自然コミュニケーションの比較分析」
- ②森田系太郎（立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科博士後期課程）
「環境的再帰性の構築に向けて」
- ③佐和達児（立命館大学立命館サステイナビリティ学研究センター研究員）
「サステイナブルな社会に向けての芸術文化の担う役割とは」

セッションC [文化の表象性]

4号館 203 教室

◎司会 平野健一郎（早稲田大学政治経済学術院教授）

①比嘉理麻（筑波大学大学院人文社会科学研究科博士課程）

「バザール経済論から捉える沖縄の市場」

②金美連（日本大学国際関係学部非常勤講師）

「キリスト教信者の仏壇、焼香、墓への思い：静岡県・三島市と静岡市の事例から」

③山崎真次（早稲田大学政治経済学術院教授）

「クアウテモク銅像の移転問題：住民運動と文化行政の関係から」

セッションD [文化のなかの個人]

4号館 206 教室

◎司会 寺田元一（名古屋市立大学人文社会学部教授）

①劉榮純（プール学院大学国際文化学部非常勤講師）

「国際結婚にみる家族の暮らしの諸相：韓国女性と日本人男性の結婚・離婚をめぐる」

②柏木貴久子（関西大学外国語教育研究機構准教授）

「外国語教育からみる移民問題：ドイツの場合」

③井上央子（筑波大学人文社会科学研究科博士課程）

「所有をめぐる実践：在日フィリピン人の子どもが生きる意味世界」

④古家聡（武蔵野大学人間関係学部教授）

「個人主義と集団主義に関する批判的考察：ナショナリズムと文化本質主義の視点から」

会員集会（12：30～13：00）

3号館第1会議室

共通論題（13：00～15：00）

セッション1「植民記憶の公共性について」

4号館 201 教室

◎司会 川村湊（法政大学国際文化学部教授）

①奥田孝晴（文教大学国際学部教授）

「歴史比較を通じて担保することができる公共性とは：東アジア教科書編纂研究会から」

②椎野信雄（文教大学国際学部教授）

「近代の記憶としての『日本史』をアンラウン：公共の中の『公』と『共』」

③若林一平（文教大学国際学部教授）

「歴史記憶の弁証法」

懇親会（15：30～16：30）

4号館 202 教室

第6回名桜大学大会風景



研究発表



公開シンポジウム

第6回全国大会について

日本国際文化学会会長 熊田泰章

2007年度全国大会は、名桜大学（沖縄県名護市）を会場として、例年通り7月前半に開催することを決め、自由論題発表申し込みも42名を数え、共通論題やシンポジウムの企画も充実したものとなって、大会のその日を待つばかりとなったところに、強力な台風の襲来を受け、大会参加者が予約した沖縄発着の飛行機便キャンセルという混乱の中、台風が大会当日には過ぎ去るという予測に基づいて、結局、予定の日時に開催することになりました。この経緯については、学会からのお知らせなどにおいてすでに詳しく書いてきました。今回、学会ニューズレターにおいて、第6回全国大会を振り返ることになり、この第6回全国大会の開催をあくまで推進した立場から、日本国際文化学会の学会としての役割などについて思うことに手短かに触れてみたいと思います。

2001年に発足した日本国際文化学会は、国際文化を研究するための基盤となる学術組織として、最初は、日本全国の様々な大学に開設されてきた国際文化学部や国際文化研究科などの学部長や研究科長が設立発起人として集まることから出発したのですが、1990年代のこれらの学部・研究科の開設が一段落した段階後、今現在においては、もはや新設学部・研究科ではなくなってきたという経年変化に対応する変化が、この学会そのものにも求められてきていると感じています。それは、ことに、この学会で研究発表を行う会員諸氏が、新設学部・研究科の開設業務に忙殺されていた時期を経て、国際文化における研究実績をその学会において発表する段階に至り、また、国際文化研究科の博士課程の学生たちが博士論文の完成に向けて研究発表することが多くなってきている、ということに対応するという意味です。新しい学会の新しい研究がこれからさらに発表されていこうとしていることに対して、学会はその学術発表の場としての役割を着実に果たしていかなければならない、それが、今回の第6回全国大会を何としても開催しなければならないし、また、困難な条件下の開催であったことを補うために臨時秋季大会を重ねて開催しなければならないと考えた所以なのです。

7月14日と15日の第6回全国大会に、交通の混乱を乗り越えて集まってこられた大学院生の皆さん（もちろん、大学院生以外の方々もおられますが、ここではこのように書かせてください）の発表への熱意に触れて、実に感じ入ったことをここに記しておきます。

日本国際文化学会第6回全国大会総括

仲地 清（名桜大学国際学群教授）

日本国際文化学会第6回全国大会は台風4号が沖縄本島を直撃した7月14日（土）と15日（日）の両日、沖縄県名護市在の名護総合学園名桜大学で開かれた。自由論題11セッションに42報告、共通論題7セッションに27論文のプログラムが組まれたが、台風で国内便の欠航、那覇一名護間の高速道路が閉鎖されるなど悪天候下での学会となり、自由論題で29報告、共通論題で3セッション10論題の発表を消化した。

プロローグ

2006年7月、東北大学で第5回全国大会が開かれた。そこでの懇親会で第6回大会の会場は沖縄県北部地域にある名桜大学に決まったことが発表された。名桜大学の瀬名波榮喜学長は全国大会を受託する挨拶の中で「名桜大学は眼下に名護湾を見下ろす日本一美しいキャンパス」とPRを忘れなかった。名桜大学に全国大会を誘致した背景には、瀬名波学長と日本国際文化学会誕生の地、龍谷大学国際文化学部の初代学部長であった故比嘉正範先生がともに沖縄県出身で、琉球大学で教鞭を取っていたという絆があった。また、瀬名波学長と故比嘉部長は沖縄県が日本へ復帰する前のアメリカ軍政府統治時代にアメリカ政府から奨学金を受けて、英語を含めアメリカ文化をアメリカの大学で学んだ共通体験があった。このような絆が背景にあったので、瀬名波学長はいつか沖縄県で全国大会を開きたいとの夢を抱いていた。1994年に開学した名桜大学は国際学部の中に国際文化学科、経営情報学科、観光産業学科を備えた一学部3学科で開学した。このように沖縄県で唯一の国際文化学科を擁する大学であったことも国際文化学会を誘致する強い要因となった。瀬名波学長の命を受けて、私が全国大会の実行委員長を務めさせてもらった。

実行委員長としては①特に大学院の学生が負担とならないように、大学内の北部生涯学習推進センター内にある宿泊施設を安くで提供する②那覇空港と名桜大学間のバスを大学が提供する③沖縄をテーマとする自由論題、共通論題、公開シンポジウムを立てて本土からの研究者に沖縄に関する話題、研究内容を提供する、を運営の柱とした。

台風4号下での学会開催

3月1日から報告要旨と生涯学習センターでの宿泊希望者を受け付けた。最終的には自由論題11セッションに42報告、共通論題7セッションに27報告が集まった。宿泊は24人定員（一部屋4人で6部屋）に対して47人の申し込みがあった。定員以上

に集まったので、一部屋の定員を6人まで増やした。悪天候となり、後日キャンセルが出て、実際には10人が宿泊した。学会参加希望者は一般会員30人、学生会員30人、懇親会参加者は一般会員30人、学生会員30人の事前申し込みがあった。大きな学会が開催されることを期待していた。

しかしながら、台風4号が沖縄本島を襲いはじめた7月12日(木)から開催が危ぶまれた。発表を予定している方々から学会は開催するかどうかの問い合わせが殺到した。台風が沖縄に上陸する前からすでに沖縄に到着した方々も数人いた。

13日(金)は沖縄と本土便の欠航が相次ぎ、那覇市と名護市を結ぶ高速道路も封鎖された。このような、悪天候の中を、熊田泰章会長と相談をしながら開催するかどうかについて情報を交換した。

特に大学院の学生から「ぜひ大会を開いて欲しい」と、熱心な希望があり、またすでに沖縄に着いた方々も数人いたので、彼らに発表の機会を与えたほうが良いと判断して、開催を断行した。熊田会長の了解も得られたので、後は天気が少しでも回復することを願った。

プログラムの展開

第1日目、14日の午前9時の受け付け時に果たして何人が集まってくださるか。セッションの司会担当の名桜大学の先生方、アルバイトの学生さん、学会副会長の木下資一先生、そして、スウェーデンからハイジ・ゴミさん、龍谷大の溝口佳代さんらが、到着していた。プログラムを変更して、すでに到着している発表者から順次、報告をしていただいた。その結果、午前中は自由論題で4人が報告を済ませた。

午後から、名桜大が立ち上げた共通論題1「現代社会における沖縄の心と癒し」と共通論題4「沖縄と世界の関係―国際化時代の生き方」にそれぞれ4人が報告した。お昼過ぎから、沖縄と本土間の飛行機便が一部欠航解除されたので、参加者が増えてきた。それでも、那覇―名護間の高速道路はまだ閉鎖中であったので、路線バスを乗り継いで会場到着には時間がかかった。熊田会長はインターネットで空席を押さえて、午後の最後のセッションに間に合わせていただいた。

15日(日)は午前9時から受付を開始して、午前中、共通論題7「次世代に残すアジア文化の技術2」

(司会 高橋禮次郎東北大学大学院国際文化研究科教授)のセッションで、斉藤征雄(東北大学大学院文学研究科教授)が「米糠をめぐるアジアの食文化」

葉剛(東北大学大学院国際文化研究科准教授)が「経済学から見た雲南省の生産技術」を発表した。東北大学から他に大学院生も数人参加して発表していただいた。

自由論題ではプログラムを再編し、25人が発表した。高速道路が封鎖している中を、路線バスで約3時間以上もかけて、那覇から来ていただいた方々に発表の機会を作ることができてほっとした。また、空の便の都合で、発表が終わるとすぐ空港へ戻らざるをえなかった方々もいた。学問研究に精進しようとする学生さんに感動した。また、中には外国でフィールド調査を終えて、国際線を乗り継いで那覇空港へ着いて、台風の中をさらに大急ぎで会場まで足を運んでいただいた方もいた。「欠航です」「どうしても行きたいです」と私とメールのやり取りをしながら、「やっと着きました」と私のところへ寄り添う学生もいた。

ホテル「ゆがふいん」での懇親会

14日の午後7時から、大学に近いホテル「ゆがふいん」で参加者100人の規模の懇親会を予定していたが、台風が強まるに従いだんだんと小さくせざるを得なかった。最終的には30人に予約を抑えたがそれでも、本当に集まって下さるか心配だった。

懇親会は名桜大学の与那覇恵子准教授の司会で執り行われた。幸い、熊田会長、次期開催大学の若林一平教授(文京大学国際学部)も懇親会には参加することができた。

懇親会は沖縄のしきたりに従って、琉球舞踊「かぎやで風」で幕開けした。歌の意味は「今日の喜びを何にたとえることができましようか。まるで蕾の花が朝露を受けてぱっと花開くような心もちです」で、琉球国王の前で踊る祝儀舞踊である。その後、名桜大学人間健康学部の高宮城繁教授の門下生の空手家による空手の演舞があった。熊田会長は「台風下での文化学会の開催の意義」を強調した。次期当番大学の若林教授は来年度の文教大学大会への参加を呼びかけた。その後、名桜大学学生エイサーチーム(学生の盆踊りチーム)が勇壮に太鼓を敲き、群舞を披露した。

会の途中、やっと間に合った大学院生が10人ほど加わり、30人予定で予約していた会場は50人近くまで膨れ上がり、盛況だった。司会者の与那覇先生の急な計らいで、2日目の発表予定者が、壇上で紹介された。発表者にはやっと着いたという安堵感で満ち溢れていた。学会発表にかける日本、中国、韓国の若い研究者の熱意に会場から拍手が広がった。

最後は、本大学教授で、名曲「芭蕉布」の作詞者である吉川安一先生の指揮で「芭蕉布」を全員で合唱した。

公開シンポジウム

最終日の公開シンポジウムは「国際化時代における『琉球(沖縄)文化』の地域性と普遍性」のテ

懇親会風景

ーマで4人のパネリストの報告があった。名桜大学の実行委員会が特に本土からの研究者向けに企画した自信作のテーマであった。企画の意図は、「沖縄県は歴史的、地理的にも日本本土の都道府県とは異なった経験をしてきた。沖縄の文化は中国、日本、アメリカそして周辺の環太平洋、東南アジアなどからいろいろな影響を受けてきた。沖縄県は軍事上、日本にとっても米国にとっても、アジアの安全保障上にとっても要石を担ってきた。沖縄の人々はかつて琉球王国であった歴史を背景にして、沖縄県がたとえ日本への復帰によって日本の一県に組み込まれたにしても、琉球人としてのアイデンティティ、琉球文化へのノスタルジーを消すことに消極的である。ボーダーレス時代の国際環境の中で、過去に海外から受けた文化的影響を背景にしながら、新しい文化を生み出そうとしている」の視点で、国際化時代における沖縄の思潮の将来像を探ろうとした。

パネリストは琉球大学比屋根照夫名誉教授が「近代沖縄と伊波譜猷」、沖縄アメリカ協会の比嘉幹郎会長が「沖縄に対するアメリカ文化のインパクト」、詩人の高良勉氏が「反復帰論と独立論の系譜」、本大学の内間直仁教授が「琉球方言を通して見た沖縄文化」で発表した。

企画者の意図は比屋根氏に「日流同祖論」、比嘉氏に「親米論」、高良氏に「沖縄独立論」、内間氏に「沖縄文化論」の視点を述べていただき、白熱した討論を期待していたが、時間の都合と参加者が少なかつたせいで、盛り上がりかけた。沖縄県内の方々、本土からの方々に、ボーダーレスの時代の中で沖縄の思潮はどう進むかについて、いくらかの関心を持っていただくことはできたと思う。また、次に良い環境でぜひ同企画を深めて見たいと考えている。

エピローグ

プロローグで、瀬名波学長が PR した「日本一美しいキャンパス」を披露することができなかったのがとても残念であった。発表者に多くの参加者の前で発表していただきたかったが、台風はすぐには去ってくれなかった。でも、そのような悪天候の中を、発表者が馳せ参じてくださり、多数の発表を実施することができた。今回の学会の成果は本土の学会理事会、名桜大学の実行委員会、発表者の協力と俊敏な判断のおかげで無事学会の形は整えて終えることができた。繰り返すことになるが、何よりも大事なことは国際文化学の研究者を目指す大学院生が台風の中をよくも本大学まで到着したことが成果であった。その具体的な成果の内容は、大会の両日を通じた参加者のそれぞれの思い出の中に残っているにちがいない。



熊田会長（左）と名桜大学瀬名波学長（右）



名桜大学学生達によるエイサー踊り



最後に全員でカチャーシーを踊る

共通論題1 「現代社会における沖縄の心と癒し」概要

山端清英（名桜大学国際学群教授）

共通論題1のテーマは、「現代社会における沖縄の心と癒し」である。4人の論者にそれぞれの専攻分野に立って論じてもらった。

論題1は、「名護市勝山区のコミュニティ・ビジネス構想」と題し、コミュニティ・ビジネスによる地域社会づくりについて考察した報告である。そのビジネスは、「シークワサー（ヒラミ・レモン）」「ヒージャー（山羊）」「やんばる（山原）の美しい自然」を地域資源とする自然農法によるユイマール型（協働・共創型）ビジネスである。ユイマールによる共同体の絆が強い地域とされる名護市勝山区は、美しい自然の恩恵が受けられ、そこで暮す人々が生き生きと輝く地域であり、そこを訪れる人々は自然の恵みと人の温もりで持て成しが受けられる。コミュニティ・ビジネスの導入による自律循環型の地域社会づくりは、外来者にとっては、「癒し」の生活空間である。論者の宮城良勝区長は、コミュニティ・ビジネスの機能には、病んだ都市社会を回復する有効な手掛かりが内在すると指摘している。

論題2は、「宮古歌謡の世界…旧暦1月よーいぬうぶなー（祝いの大祭）の祭祀と歌謡…」である。論者の新里幸昭教授は、「日本文学～琉球・沖縄の歌謡～宮古歌謡」の関係について、次のように把握している。「日本文学では、すでに失われた呪禱的・叙事的歌謡が、奄美大島以南の琉球文化圏では祭りの中で厳粛に伝承されてきた。琉球・沖縄の歌謡は、この地で生まれ育ってきた人々の生の証」である。また、「神話から歌謡へ」「歌謡ジャンルの展開」など、「歌謡（文学）の基本的な諸問題」を提示してくれるのが、「宮古の歌謡」である。

論者は、「宮古歌謡」を、これまでの研究から次のように分類する。「呪詞・呪禱的（ニガリ、デーユン/ピャーシ、タービ、ニーリ、フサ）、叙事的（アーク）、叙情的（クイチャー・アーク、トーガニ、シュンカニ）。その歌謡群は、「唱えものが謡いものに重なりをみせるものや、呪禱的から叙事的の展開を髣髴とさせるものや、五穀豊穡、自然神と人格神とのまぐわい、祖先神の系譜立て、英雄の事績、死と再生、あふれる叙情をうたったものまで多彩である。」論者は、宮古歌謡の中から当該論題を取り上げ、そのうちに潜む「宮古に生まれ育った人々の生の証」に迫ろうとしている。

論題3は、「沖縄の新歌謡『芭蕉布』の創作背景」である。論者の吉川安一教授は、自作の「芭蕉布」の創作背景について次のように述べている。「先人の歌謡文化の恩恵に浴している私は先人にならって21世紀を生きる証として、（中略）現代の歌謡

文化を築いてみたいと考えた。歌謡詞の創作への動機・意図は、郷愁、縁、教育活動、郷土沖縄の自然、文化・歴史への意識の高揚、沖縄の歌謡のひろがり、若者達の創作活動への期待等をあげることができる。」

また、「私の第一のふるさととは、生誕の地、八重山の鳩間島で、第二のふるさととは職業を通して生活の根拠地を構えた名護市、やんばるである。私の作品にはふるさとをテーマにした歌謡詞が多い。沖縄の新歌謡で作詞 吉川安一、作曲 普久原恒勇で発表した「芭蕉布」はその作品のひとつである。」と述べ、自己の出自と作品とのかかわりを明らかにしている。

論題4は、「沖縄空手の歴史的な性格とその真髄」である。論者の高宮城繁教授は、民族的存在証明としての武道を位置付けたうえで、沖縄人であることを「最も端的に証明することができる文化手段」は、空手であるという認識に立っている。この沖縄独自の武技としての空手について、「技法の五大要素と心眼」を特定して、次のように述べている。沖縄空手の五大要素とは、「沖縄の方言でいうムチミ、アティフワ、チンクチ、フェーサ、ククルである。」「ムチミとは弾力性に富む身体の働き、アティフワとは物理的衝撃力、チンクチとは筋骨、フェーサとは早技、ククルとは心眼（平常心）をいう。」「これらの五大要素を一体的に身に修めたものは絶妙な使い手であり、名人であり、達人である。」そして、「技、神に入る」「心眼（平常心）」「修行の順路」「道の世界」「空手の真髄」について論じ、民族的運動文化の牢固性（欧米人には容易に踏み込めない物理性と感性）に言及している。この民族的運動文化の牢固性こそ沖縄空手の真髄であると結んでいる。その背景には、沖縄の人々が原初的に戦いを否定し、人倫思想を実践する手段として「空手」を求め、「和の心」を大切にしたいという歴史的な性格があることを忘れてはならない。



共通論題報告風景

共通論題4 「沖縄と世界の関係—国際化時代における沖縄の人々の生き方」概要

仲地清（名桜大学国際学群教授）

このセッションでは知念英信氏（沖縄県庁世界ウチナンチュ大会前事務局長）が「世界ウチナンチュ大会参加の意義」、山縣正明氏（名桜大学大学院国際文化研究科修士課程）が「中国の西沙・南沙諸島占領の経緯と沖縄尖閣諸島を巡る類似性」、仲地清（名桜大学国際学群教授）が「国際政治における沖縄が内包する可能性」、新里民夫氏（宜野座村教育委員会学校教育課長）が「地方自治と米軍基地」の論題で発表した。

企画の趣旨は「グローバル時代の今日、国際環境の変化と地域、個人の関係は日々、深くなっている。歴史的に沖縄県、沖縄の人々は中国、日本、アメリカと深い関係があった。沖縄と沖縄の人々と国際環境の関係の特徴を明らかにすることと、国際化時代の沖縄、沖縄の人々の行く末について考察する」ことである。

海外在住の日系人は約260万人といわれる。その、ほぼ15%は沖縄県系人で、ネットワークづくりを目指し、世界のウチナンチュ大会が沖縄県の主導で1990年に初めて開催され、その後もほぼ5年ごとに大会が行われてきた。2006年の第4回大会には海外の県系人約4,400人が参加した。その成功した原因を知念報告は次のように分析する。

沖縄県は1972年に日本へ復帰して一県となり、固有の沖縄文化（琉球文化）が日本文化化していく中で、日本を相対化する動きが復帰後出てきた。これはウチナンチュ意識を確認して、海外に住むウチナンチュ社会（沖縄県人会）とのネットワークを結ぶ運動に向けられてきた。

知念報告はまた「沖縄と日本のメンタル文化の比較」で「沖縄はイチャリバチョーデー（会えば兄弟）、本土は郷に入らば郷に従え。沖縄はニライカナイ（幸は海から）、本土は天孫降臨の思想」と比較分析し、「メッカの巡礼にも似て、魂の栄養の補給に海外から帰ってくる」がウチナンチュ大会の成功のカギであると結論づけている。

山縣報告は中国の西沙、南沙諸島の占領経過を分析して「中国の占領の手順はまず領有権を主張し周到な海洋調査を積み重ねて、ついで民間人が主体となって進出してくる。その後民間人を支援するために軍が進出し軍事基地を作り上げ、支配権を確立するやり方である」として、沖縄県石垣市に属する尖閣諸島も同じ手順で支配権を確立していく可能性

があると、指摘した。

仲地報告はソフトパワーの分析視点を取り入れて沖縄問題を解決しようとする試みである。従来の視点を通した論文の結論は「アジアの安全が確立するまでは沖縄基地の存在は重要」が、大方の結論であった。最近、国際政治学を分析する視点として、ソフトパワーがよく紹介されている。これは、国連が提唱する人間の安全保障にも結びつく。1945年から1972年まで沖縄は米軍の統治下にあつて沖縄は「米軍基地を撤去、縮小する県民運動と日本へ復帰する運動」を展開してきた。沖縄の運動は基地を撤去できなかったことで、過少評価する見方もある。しかしながら、今日のイラン戦争後の状況と比べると、沖縄では異民族統治下の中で大きな事故、事件が起こらなかった。そのような沖縄の政治文化を観察すると、沖縄には優れた政治文化があるのではと推測する。たとえば、嘉手納基地を県民が腕をつないで包囲する基地反対運動はやわらかい運動である。また、沖縄は復帰後の日本国内で平和運動、自治権拡大運動などで全国をリードしていく責務も持っている。これらを総称して沖縄のソフトパワーと呼ぶ。沖縄のソフトパワーは権力論に変わる新しい国際政治の分析視点になりうるというのが、仲地報告の結論であった。

現在、沖縄本島北部12市町村は名護市を中核に日本政府優遇予算を受けて北部振興策を展開中で、特に名護市辺野古への普天間飛行場移設受け入れを前提にした北部振興策の諸事業が推進されている。日本政府は沖縄の米軍基地の存在を前提に、或いは引き替えに沖縄県ひいては沖縄本島北部の振興を図って行こうとしている。2007年5月には「米軍再編法」が成立して、新たな安全保障環境の変化に対応する日米同盟の強化を目指していると新里報告は判断する。そのような日米同盟の戦略が強化されている中で、当然日本政府から市町村へ配分される基地関連の交付金にも影響が出てくる。沖縄ではこのような国際環境の変化、日米同盟結束の濃淡が地方自治の財政の潤いに関係してくると、現場の実情を報告した。

4 報告は沖縄県、沖縄の人々の日々、および未来の動向は国際環境と密接に結ばれていることを示していた。共通に言えることは沖縄においては日本政府の外交政策に関係なく、より沖縄的な路線で動いているような気がした。

フォーラム「沖縄県人会のネットワークを生かした南米現地実習—名桜大学の試み」概要

住江淳司（名桜大学国際学群准教授）

まず、名桜大学・現地実習の全体像であるが名桜大学の中南米文化コースは、外国語大学系を除いては日本では数少ないコースの一つである。移民県として知られる沖縄県に所在する名桜大学は、ブラジル、アルゼンチンそしてペルーの大学と学術交流協定を締結している。現地実習という国際文化学科の必修科目は、南米3カ国の学術交流協定大学で集中講義を受けるとともに、各国の文化に直に触れ、大学で学んだ理論を体験的・実践的に検証・確認するという観点から、平成8年9月に始まった。

国際文化学科中南米文化コースでは、「中南米の言語と文化」、「中南米の歴史」、「中南米の社会」、「中南米の民俗」、「移民と異文化」それに「外書講読」という科目が提供されており、毎年9月に行われる南米の協定大学における集中講義は、これら名桜大学で提供されている科目に対応した内容で実施されている。

「中南米現地実習」は、これまで11回行われ、参加した学生の総数は634名に上る。期間は3週間とし、9月の夏期休暇を利用している。単位は60時間分の4単位を与えている。対象学生は3年次で、実習に赴く前期（4月から7月）を使って週一回の事前授業である「地域文化演習」（2単位）でラテンアメリカの地域研究やリスクマネジメントを履修させている。

中南米現地実習の取り組みの特色については、南米3カ国の沖縄県人会との交流会を毎年実施し、移民の歴史について現地の長老からじかに話をうかがったり、沖縄の伝統芸能であるエイサーや空手の演武を披露したりして文化交流にも努め、人間としての成長がある。毎年9月になると故郷の沖縄から名桜大学の現地実習生がやってくることで、南米各国の沖縄県人会の「恒例行事」となっている。

次に中南米現地実習の有効性としては、現地実習は平成8年に始まり平成19年には12回目となるが、中南米現地実習を終えるとブラジル、アルゼンチンの学術交流協定大学に留学を希望する学生が出てくる。名桜大学は、語学を専門にしている外国語大学ではないが、平成19年までに1年間滞在の留学生をブラジルには45名、アルゼンチンには22名、それにボリビアには4名、合計で71名派遣してい

る。また、ブラジルのロンドリーナ州立総合大学とアルゼンチンの産業社会科学大学とは単位互換協定を締結し、これまでブラジルから本学へは14名、アルゼンチンから本学へは1名を国費や県費の奨学生として受け入れている。

中南米現地実習終了後、その教育効果の測定のため、実習に参加した学生全員に対しアンケート調査を毎回行っている。その結果、90パーセントの学生が中南米現地実習を「満足している」と答えている。また、名桜大学の卒業生が中南米の在外公館に就職するケースや、訪問先から本学の留学生として入学する等のケースが年々増え、相乗効果がでている。

最後に中南米現地実習の将来の展望としては、今後名桜大学の中南米現地実習担当教員と南米3カ国の沖縄県人会並びに学術交流協定大学の担当教員との密接な連携を通じて、国際舞台で活躍できる人材の育成が求められる。たとえば、コンベンション・アイランド構想を宣言している沖縄県では、平成17年度に沖縄でサミットに次ぐ規模の国際会議である「米州開発銀行年次総会（IDB）」が開催された。こうした中南米地域に特化する国際会議での同時通訳や同地域の国際機関で働く人材の育成のため、より高度で戦略的な海外現地実習から発展させた取り組みが今後重要な課題となる。

そこで、名桜大学は平成17年にブラジルのパラナ州、ロンドリーナ市にある「日伯文化連合会（アリアンサ）」と企業研修協定を締結し、名桜大学の新卒生と既卒生を対象とした留学制度を確立した。この制度は学部時代にロンドリーナ州立総合大学でポルトガル語を学習し、帰国後もう一度ブラジルで語学の能力を向上させたいという学生の希望に鑑み実現した制度である。具体的には、ロンドリーナ市にある日系新聞社や日系旅行社、それにアリアンサの附属日本語学校などに勤務し、各企業から報酬を得て、アリアンサで週3回ポルトガル語を無料で学習する制度である。滞在研修期間は最大で5年間とした。また、官学合同の取り組みである名護市とロンドリーナ市の間で平成18年2月に完成したロンドリーナ州立総合大学キャンパス内にある「日本文化研究センター」でのポルトガル語の同時通訳者育成は、中南米コースの今後の一つのモデルケースとなるであろう。

あとがき

沖縄を襲った台風の威力はすさまじいものでした。このような状況の中、大会開催に尽力された名桜大学の先生方に深く感謝いたします。また悪条件の中、遠方より駆けつけて研究発表された方々、参加された会員の熱意に敬意を表します。原稿執筆された先生方、短期間でまとめていただき、ありがとうございました。

ニューズレター編集担当：神戸大学大学院国際文化学研究科教授 木下資一